

4. 全体会議報告

東京未来大学 平成 23 年度 春学期全体会研修

「授業改善に向けた取り組み事例について」

日時：平成 23 年 3 月 30 日（水）13:00～14:25

場所：東京未来大学 みらいホール

平成 23 年 3 月 30 日、非常勤講師を含めた教職員に向けて、今までの FD 活動と今後の目指す方向性について報告された。

（1）今までの FD 活動

本学の FD 活動は「授業連携」「授業改善」「ICT」の 3 本柱で取り組んできた。PD(Professional Development)活動を基盤とし、教職員の資質向上を目指している。

（2）授業改善に向けて

授業改善の真の目的は「学生に授業を理解させること」ではなく、「授業理解を通して学生の学士力を育てること」であり、授業を受け持つ教職員は、そのことを念頭に学生の指導方法や授業構想など各自の授業力向上に向けて取り組んでいくことを期待する。

そのためにも、教職員は学士力の基盤となる「汎用的スキル」をきちんと理解することが大切である。

「汎用的スキル」は大きく分けると、①社会と関わって生きる能力（社会性、市民性、受容性）と、②自分自身が身につけるべき資質（倫理観、生涯学習力、課題解決力、創造力）である。これらの多くは初年次教育で基盤を育てているので、今回は 1・2 年次必修科目の「CS」と、授業連携の視点から、実際の取り組み事例について以下にまとめる。

1) College & Career Skills (CS) について

汎用的スキルの①社会と関わって生きる能力（社会性、市民性、受容性）と、大きく関わっている CS の授業内容が紹介された。

CSはクラス単位で担当CAが行っている授業で、未来祭、三幸フェスティバルなどの行事を通して社会性を育む「チームビルディング」と、成功した人に共通する物の考え方や実践方法を学ぶ「成功の法則」、大学生としての意識やマナー、レポートの書き方などを学ぶ「大学基礎講座」の3本柱で形成されている授業である。今回は「成功の法則」で取り扱っている「WIN-WINの関係」について、パワーポイントを用いて紹介された。

※平成23年度～名称変更

CSⅠ→カレッジ&キャリアスキルズA・B

CSⅡ→キャリアデザインA・B

2) 授業連携について

① 国語表現とプレゼンテーション

汎用的スキルの②自分自身が身につけるべき資質（課題解決力、創造力）と、大きく関わっている1年次必修科目「国語表現」と1,2年次必修科目「プレゼンテーション」の授業連携について紹介された。

課題解決力が身に着くことを目的に論理的な思考力を鍛えている「国語表現」と、論理的な思考を基盤として、それを生かした実際の場における話し方を学ぶ「プレゼンテーション」は目指す方向が同じなので、平成20年度から授業連携を行い汎用的スキルの向上に努めてきた。現在も汎用的スキルの系統性のある質的向上が図れるように、毎年シラバスを修正しながら、授業改善を目指している。

② 国語表現とプレゼンテーションと連携した子ども臨床心理学

平成22年度は1年次必修科目「子ども臨床心理学」とも連携した。「子ども臨床心理学」では小グループに分かれ、教科書の一部を要約し発表するのだが、「国語表現」や「プレゼンテーション」で培った思考力や表現力を生かし、常に全体の中のどのような位置にあたるのか把握させたり、台本に頼らず表情豊かに話すよう指導したり、授業連携をすることでより授業への理解も深まり、汎用的スキルもより確かなものになるよう取り組んできた。

③ 国語表現とプレゼンテーション、CSと連携した子育てカンファレンス

また「国語表現」「プレゼンテーション」「CS」と、「子育てカンファレンス」の授業とも連携した。「子育てカンファレンス」では「学生にとっての必要な居場所」というテーマについて考え発表させる取り組みをしており、その中で「国語表現」や「プレゼンテーション」で伝えている思考力を生かして内容をまとめさせている。これらの授業連携は全て、学生の汎用的スキルの向上を目指して行われている。

④ 平成 23 年度の授業連携

2 年次必修科目の「プレゼンテーションⅡ」の授業で、1 年次必修科目「情報処理基礎」と 3 年次選択科目「対人コミュニケーションスキル」とで授業連携を図り、シラバスを修正した。今後はそれぞれの授業担当者が、どのような汎用的スキルを育てていくか、授業連携も視野に入れ考えていくことが大切である。

3) 授業づくりについて

自分なりによい授業を求めて—「子ども美術」の実践から—

鈴木光男先生より、より良い授業をするために、学生理解を通して授業改善をしてきた事例発表が紹介された。

① 学生理解のために

「学生の実態や学ぶ道筋を探る」「学生の側に立って授業をつくる」「設計よりデザインの意識に立つ」ということを心がけ、学生理解に努めている。

授業のはじめにアンケートを実施し、「美術」について学生がどのような意識を持っているかヒアリングしたところ、「美術は嫌い」「図工も絵も大の苦手。ついでに美術とかの先生も大嫌いでした。」など美術教育に対する学生の不全感が浮き彫りになった。また保育現場で必要となる学士力と実際の学生が身につけている学士力の差が見えてきたので、学生が「美術教育の楽しさ」や「学ぶ意味や学びがいなど、教育的価値」を見いだせるような授業になるよう工夫した。その結果、授業後にとったアンケートでは「美術教育に対する意識（好き・嫌い）」や「美術教育に対する意識（得意・苦手）」が飛躍的に向上した。

② 授業力について

「フィードフォワード情報を提供する」「ルールは少なく、しかし徹底する」という点を意識して、学生指導をしている。

未来の教育・保育現場勤務に結び付けた相互作用を心がけ、「時間を守る」「私語を慎む」など最初にルールを決め、徹底的に行っている。その結果、はじめは教員から指導しないと気付かない学生も、学生同士で注意しあえる関係になり、一人ひとりがルールを意識して行動できるようになった。

(3) 坂元学長より

学士力を育てるための教職員の活動、FD 活動の今後について講話がなされた。その中でも授業連携の重要性や、授業づくりの必要事項などが伝えられた。

また今後の検討課題として、学生の学力の差を図に表し、全教職員に配布し解釈例などのアンケートを実施。アンケート結果を専門の教職員に見てもらい、成果をまとめ FD 報告書に発表することがあげられた。